Benesse Report

データで教育を読む

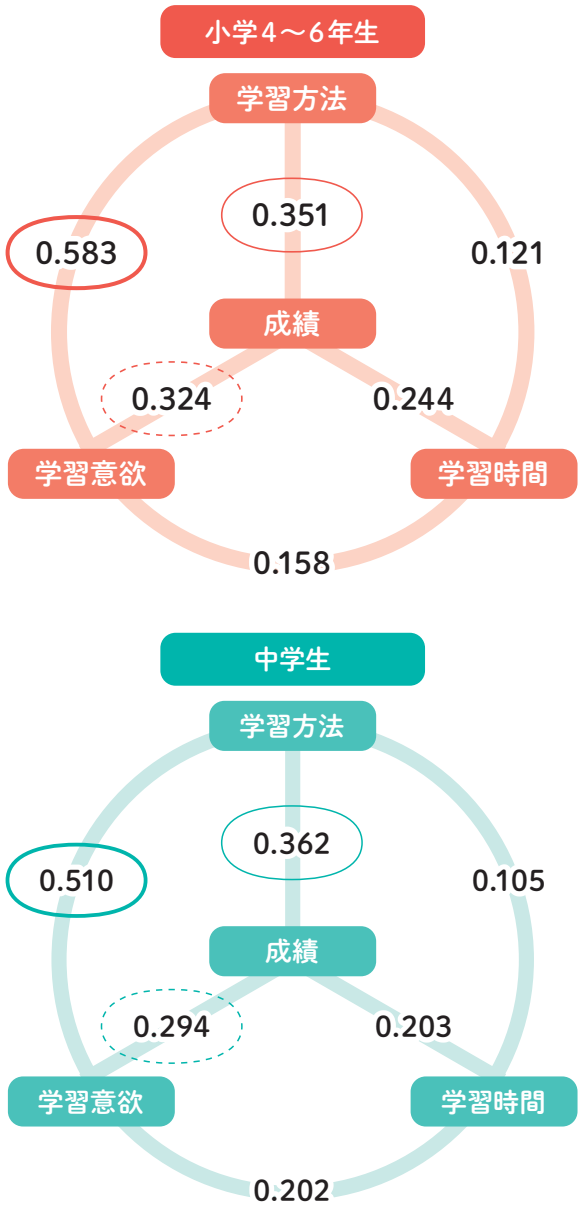
第25回

子どもの成績向上に関連するものは何か

現行の学習指導要領では、育成を目指す資質・能力として、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱が整理された。その下で学んできた子どもの成績と学習方法・時間・意欲の関係を分析し、学力向上のヒントを探っていく。

1 「成績」には、「学習時間」よりも「学習方法」が強く関連

図1 子どもの成績と学習方法・学習時間・学習意欲との関連（学校段階別）



注1）数値は相関係数。－1～1の間の数値をとり、1に近いほど、強い正の相関があることを意味する。
注2）「学習方法」は「上手な勉強のしかたがわからない」、「学習意欲」は「勉強しようという気持ちがわかない」に対して、「とてもあてはまる（=1）」～「まったくあてはまらない（=4）」とした。「学習時間」は学校の宿題、家庭学習、学習塾の1日あたりの時間の合計（分）。学校の「成績」は各教科の成績（5段階の自己評価）を合算し平均値としたもの。

成績向上には学習の「質」が重要

現行の学習指導要領では、2030年の社会を見据え、変化の激しい時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を3つの柱で整理している。その下で学習に取り組んできた児童生徒の成績と学習状況の関係を見るため、2023年7～9月に小学4～6年生と中学生に実施した調査結果を用いて分析した。

まず着目したのは、「成績」と「学習方法」「学習時間」「学習意欲」の関連だ（**図1**）。小学4～6年生・中学生ともに「成績」と最も相関が強かったのは「学習方法」で、次に相関が強かったのは「学習意欲」だった。最も相関が弱かったのが小学4～6年生・中学生ともに、「学習時間」だった。成績の向上には、「学習意欲」や「学習方法」など、学習の質が重要であると考えられる。

次に、「学習方法」「学習時間」「学習意欲」の関連を見ると、小学4～6年生・中学生ともに、「学習方法」と「学習意欲」の間には強い相関があることが分かった。「学習意欲」が高いほど上手な「学習方法」が分かり、「学習方法」が分かっているほど「学習意欲」が高いと言える。

OECD生徒の学習到達度調査（PISA）や文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果から、日本の子どもはコロナ禍後も高い学力を維持しているものの、学習時間は徐々に減少していることが分かっている。しかし、今回のデータが示す通り、学力向上にとって重要なのは学習の量よりも質であることを踏まえれば、学習時間の減少を悲観的に捉えず、学習の質を高めるために何をすべきかに目を向けていく必要があると言えるだろう。

出典「子どもの生活と学びに関する親子調査 2023」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。小学１年生から高校３年生までの親子約２万組を対象として、2015 年より毎年実施。2023 年は、７～９月に行った。子どもの成長のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにしている。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

https://benesse.jp/berd/shotouchutou/research/detail_5929.html

データ解説

ベネッセ教育総合研究所
主任研究員
岡部悟志 おかべ・さとし

本調査のほか、乳幼児とその父母を対象としたパネル調査（縦断調査）にもかかわる。中でも、子どもから大人への移行段階にある青年期の発達・成長プロセスに関心を持ち、研究を進めている。

2 成績上位層ほど自律的な動機を持ち、自己調整しながら学習に取り組んでいる

図2 勉強する理由（学校段階、成績別）

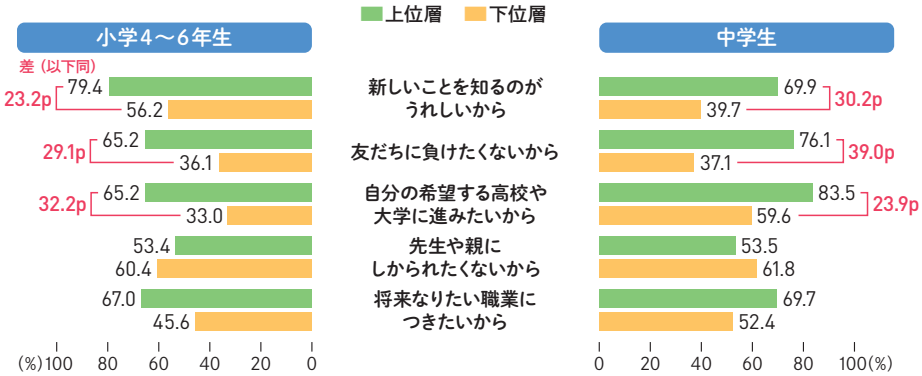
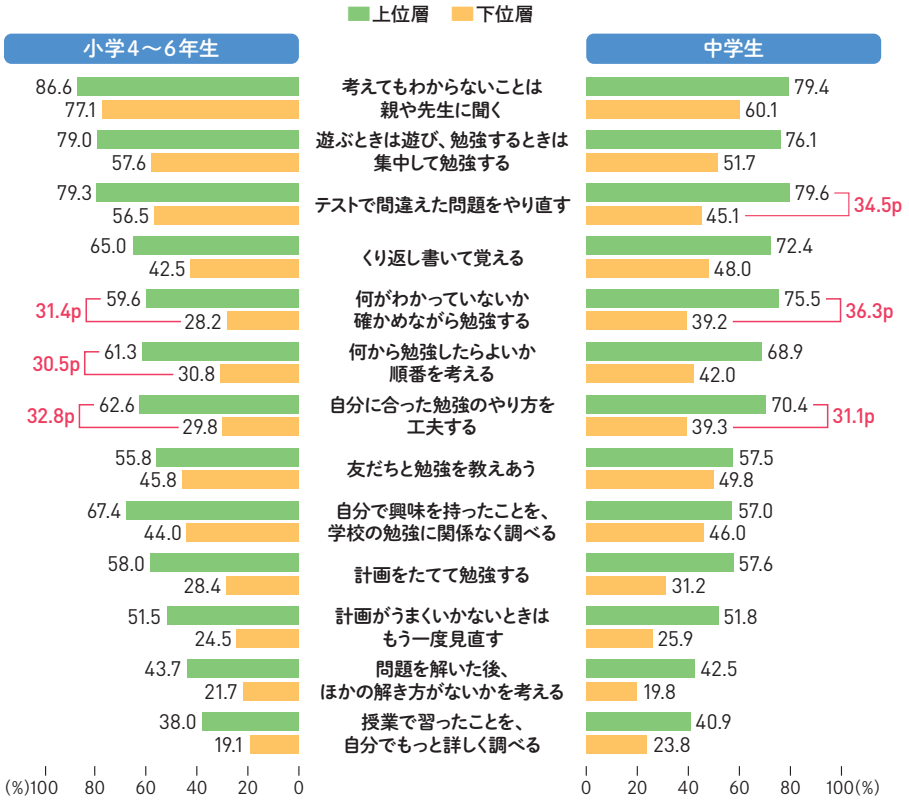


図3 勉強する方法（学校段階、成績別）



注１）図２は「とてもあてはまる＋まああてはまる」の％、図３は「よくする＋ときどきする」の％。
注２）成績別：各教科の成績（５段階の自己評価）を合算したものを３等分し、上から順に、上位層・中位層・下位層とした。ここでは、中位層を除いて表示（図２・３共通）。
注３）成績上位層と下位層で肯定率の差が大きかった上位３項目にポイント差を示している（図２・３共通）。

成績上位層は自律的な動機づけで学習

では、どんな理由で勉強することが成績と関連しているのか見てみよう（**図2**）。成績上位層と下位層で差が大きかった項目は、小学４～６年生・中学生ともに、「新しいことを知るのがうれしいから」「友だちに負けたくないから」「自分の希望する高校や大学に進みたいから」だった。中学生では、高校入試が控えているからか、肯定率が最も高かった項目は「自分の希望する高校や大学に進みたいから」だった。成績上位層では、自分の意思で学ぶ自律的動機づけで学習していることが見て取れる。

一方、成績下位層は上位層と比べて、「先生や親にしかられたくないから」が多い。他者のコントロール下で学ぶ他律的動機づけが強いようだ。

自己調整して学ぶ成績上位層

次に、学習方法と成績との関連を見ていく（**図3**）。成績上位層と下位層で肯定率の差が大きかった項目のうち、小学４～６年生・中学生に共通するのは、「何がわかっていないか確かめながら勉強する」「自分に合った勉強のやり方を工夫する」の２つだった。成績上位層では、メタ認知能力を働かせ、自分で学習を調整して取り組んでいる様子がうかがえる。また、中学生では、「テストで間違えた問題をやり直す」も、肯定率の差が大きかった。

これらのデータを踏まえると、よい成績を上げている児童生徒は、自らの意思で学び、学習方法を調整するといった質の高い学習をしていると言える。学校には、それらを意識した授業づくりや児童生徒への働きかけが求められるだろう。